

医療事務の授業における DPC

Reading Method for “Diagnosis Procedure Combination”

佐藤 麻菜

SATO Mana

Many students in the lectures of “Medical Secretary Computer” find it difficult to understand the text of Diagnosis Procedure Combination, though they must pass the DPC examination to qualify as a medical secretary.

1. はじめに

医療事務の勉強は医療費を請求するための知識を身につけるものである。それには、まず医療機関の特殊性を認識し、医療機関で働くための基礎知識として、最低限の医学知識、医療用語を知り、且つ、診療費の請求は医療保険制度で賄われているため、保険制度の知識とともに、厳正な公平性を要求されるが故の細かい診療報酬の請求方法を習っていく。その診療報酬請求事務は、点数制で出来高払いが基本だが、近年、包括支払い方式が取り入れられている。急性期入院に限られてはいるが、全国医療機関での割合は多くなる傾向にあり、特に大きな病院では、この請求方法を行っている。この包括支払い方式は従来の医療事務のいわゆる診療報酬請求事務をさらにステップアップして、コーディングの知識も必要になってくる。

コーディングというと診療情報管理士の資格にのみ、医学知識に基づく診療録管理のために病名からのコーディングが必要とされているが、医療事務のレセプトにも後述するいわゆる DPC のレセプトが加わってくると、コーディングは勿論必須である。大病院の医事課に就職をめざすなら、診療報酬請求事務能力認定試験や医療秘書技能検定試験等の合格のみではなく、DPC の知識、コーディングの勉強もこれからますます必要になってくると思われる。

そうしたことから、最近、検定試験にも出題されるようになり、いよいよこの DPC の勉強は、授業として早い段階でカリキュラムに取り入れなければならない。

2. DPC とは

DPC (Diagnosis Procedure Combination) とは、厚生労働省が、作成した医療機関別包括評価の導入で用いる新しい診断群分類である。一般に医療現場で用いる DPC とは、この診断群分類に基づく包括支払い（診療報酬請求制度）のことを言う。診断群分類を用いた診療支払方式は、世界のさまざまな国で、それぞれの国の実態に合わせて開発され、国際的なツールとして用いられている。DPC と区別して、DPC に基づく医療費支払い制度を DPC/PDPS (Per Diem Payment System) と名づけている。診療報酬の改定と同じく2年ごとに改正され、わが国の急性期入院医療の効率化に寄与している。

現在、日本では DPC 対象病院となるには急性期の医療体制を有すること、コーディングが適切に行える体制を有すること等の条件を満たす必要がある。又、DPC 対象病院の中でも、DPC の算定対象となるのか、従来の診療報酬請求事務のように点数表からの出来高払いとなるのか、診断群分類により包括されるのは、入院基本料、検査・画像診断、投薬、注射、1000点未満の処置の部分であり、医学管理等、手術・麻酔、リハビリテーション、放射線治療、1000点以上の処置は出来高算定、これらを合算した額での月単位の請求となる。

3. DPC と現在の医療事務

DPC 制度は、もはや、急性期入院医療の中心的役割を果たしている、と言われている。DPC 制度導入による効果としては、まず、在院日数の短縮化があげられ、これは医療費の効率化には確かに効果的だがこの短縮化には、他の面での賛否両論がある。

しかし、DPC 制度の大きなプラス面はひとつには診療内容の透明化、そして、そのためにそれぞれの医療機関の地域における役割が明らかになり、地域との緊密な連携が進んでいくことがあげられる。

この DPC 制度が実際に院内で働く者にとってはどうなのか。今となっては、考えられないが、「診療報酬が包括される＝全てコンピューターで行われ、もう医療事務は必要ない」。

という話が10年以上も前に、一部の、現場を知らない方たちの中で流れたことがあった。今の医療事務の現場はどうかと言うと、出来高と包括の混在、コーディング、DPC のデータ分析、データ活用で、てんやわんや、猫の手も借りたいところではないだろうか。

また DPC 制度においては、診療と経営の両輪がうまく機能するためには、院内の診療部門と事務部門の連携体制と情報共有が大変に重要になってくる。医事に携わるものは、レセプトを作るだけではなく、このデータ分析に基づく（医師の専門性を見ながら）病院経営に関与していかなくてはならない。否が応でも医療事務員は日々勉強していかなくてはならないのである。

4. 医療事務の検定試験における DPC と学生の理解度

4.1 医療秘書技能検定試験に近年出題された DPC の問題

最近、この DPC の問題が医療秘書技能検定試験の1級の問題、又準1級、2級の文章問題などにたびたび出題されている。1級の問題では、例として46回の1級の問題では、DPC/PDPS 対象病院のレセプト作成が出題され、主傷病名は、右腎結石（ICD-10:N200）であり、その他副傷病や、栄養障害等の情報があり、調整係数、機能評価係数Ⅱより、機能評価係数を導き出すこと、その上でレセプト作成（穴埋めの三択ではあるが）、包括評価部分と出来高部分に分かれている DPC のレセプトを作成する問題になっている。包括部分は勿論、診療項目の中でどの部分が出来高払いになるかを理解していないと解答できない。

準1級の文章問題では、次のような正誤問題が出題されている。

第42回

- DPC 算定の対象患者は、一般病棟に入院している患者であって、包括点数の設定された診断群分類に該当するものが含まれる。

第44回

- DPC における疾病分類は、医療資源を最も投入した傷病名によるが、入院中に診断群分類が変更になった場合は、退院月に診療報酬の差額を調整しなければならない。

第45回

- DPC による算定において、人工腎臓「1」で使用したダイアライザーは、包括となり、別に算定できない。

また、2級の42回にも次の問題が出題されている。

- DPC は、入院期間別点数（1日あたりの点数）が診断群分類ごとに上げられており、診療報酬は1日あたりの定額を基本として算定する。

準1級の45回を除き、DPCの基礎的な問題である。45回は、DPCの算定の内容に踏み込んだ問題になっている。しかし先にあげた1級にDPC算定の問題が出題されるのは、この医療秘書技能検定試験の1級は受験者も多くて15,6名、少ない場合は4,5名で合格者は1,2名という難解な試験であり、学生のみではなく実務者や専門者が受験する試験なのでこれは当然といえるが、準1級やまして2級で出題されるとなると、授業できちんと学生が理解していなければならないといえる。

4.2 専門学校におけるDPC関連の授業カリキュラム

1例として、東京の医療福祉系専門学校生で、将来の就職目標は医療機関の医事課勤務か、あるいは診療情報管理士を目指している学科の1年次と2年次の授業カリキュラムをあげる。

1年次の専門科目は、診療報酬請求事務・病院・医療用語・医療法規・医療概論・人体構造・機能論・臨床医学・臨床検査・薬学概論・医事コンピューター などであるが、この他に、DPCに直接関連する科目としては コーディング概論 がある。

2年次になるとやはり専門科目の診療報酬請求事務・医療法規・臨床医学各論・医学用語・医療管理・医療統計学・病院実務マナー・医事コンピューター・電子カルテなどで、この他にDPC関連としては、コーディング・国際疾病分類学・DPC基礎 がある。

この授業カリキュラムで学生がどのくらいDPCのことを理解できているか、簡単にアンケートを行い調べてみた。

4.3-1 アンケート実施

I. アンケート対象 東京の医療専門学校生 2年生46名 1年生36名

II. 実施時期 平成23年11月

III. アンケート項目

1年生対象 36名

- ① DPCを知っていますか？
- ② DPCの診療報酬支払い制度について説明してください。

4.3-2 アンケート結果

① の質問に対する回答

知らない（分からない）	16名
聞いた事はあるけどよく分からない	9名
一度も聞いたことがない	5名
入院料が病気によって決まる	3名
ICD-10のこと	1名
疾患別に点数が決まる	1名
急性期の入院患者を疾患別に診断群分類でわけ	1名

② の回答

分からない、説明できない、一度も聞いたことがない	27名
包括払い（方式）	3名
疾患別だから、点数を調べなくて良い	1名
電子レセプト	1名
無回答	4名

アンケート結果1年生の場合

1年生では、DPC 関連の授業がほとんどなく、内容は理解出来てはいない。しかし、医療機関のあれこれの授業を受けている中で少しは知っているであろうと思っていたが、一実は私も診療報酬請求事務の授業の中で、一度口にしたことがあり、使用している教科書にも DPC 導入の経緯、概要、それに算定の例も載せてあるというのに。

確かに、学生は授業で学習した事柄の100パーセントまでは覚えていないものである。しかし、何らかの回答があるかと思っただ、一度も聞いたことがない、知らないと解答した学生が、8割近いというのは少々問題ではないだろうか。

アンケート項目2年生

2年生対象 46名

- ① DPC の説明を簡単にしてください。
- ② DPC のレセプトと普通のレセプトの違いを述べよ

- ③ DPC のレセプトを見たことはありますか
- ④ DPC のレセプトを作成しことはありますか
- ⑤ 就職する病院が DPC 対象病院である確率は
- ⑥ DPC 対象病院で仕事をするため、どのような知識、どのような授業が必要だと思いますか

① の回答

1日ごとの包括点数と出来高点数の合計等の大まかな説明	15名
対象病院に限る、入院患者、包括点数等の詳しい説明	7名
上記に加え、ICD-10の説明	2名
定額払い等、少し簡単な説明	12名
包括払い等、1行の説明	6名
無回答	4名

② の回答

出来高のみと包括+出来高（理解している）	17名
包括と出来高（やや理解不足、または説明不足）	15名
上記に加え、ICD-10の説明	2名
よくわからない、分かりません	8名
無回答	4名

③ の回答

ある（実習病院等で）	7名
無い	37名
無回答	2名

④ の回答

ある（実習病院で少しだけ）	5名
無い	38名
無回答	3名

⑤ の回答

80%	8名
70%	12名
60%	7名
50%	6名
40%	4名
30%	2名
分かりません	5名
無回答	2名

⑥ の回答にはいろいろな意見があった。

例を挙げると

まず、DPC が何であるか、きちんと知らないで、その説明が聞きたい。というものが3,4名。

病気と治療法をしっかりと学ぶべき病気に対しての手術や検査の知識という意見がそれぞれ2,3名。授業を一連の流れとして提案してくれた者もいた。ICD コードの引き方から入って、検査・処置・投薬の一連のストーリーへの考察、つまりはカルテ読解力、そして点数表や本の引き方、調べ方を習いたい。

なかでも最も多かったのは、DPC のレセプトの授業がやりたい。という意見で10名ほどがいた。

アンケート結果 2年生の場合

2年生は、DPC について少なくとも一度は習っているはずである。しかし、以前に述べたように学生は一度だけ授業で説明を受けても、忘れてしまう。よって DPC の説明が出来ない学生が多くいるのである。

しかし、DPC の明細書（レセプト）、レセプト算定は8割が見ていないし、知らないという回答であり、よって関連授業ではレセプトまでは教えていないことになる。興味深かったのは、実習に行って現場ではじめて、DPC のレセプトを見た、あるいは多少算定まで学んで来た者がいたことである。

専門学校の実習では、比較的大規模の医療機関、大学病院やグループ系の総合病院で、DPC

対象病院が多い。その現場で実際の算定を目の当たりに出来たようである。そうしてまたその実習病院への就職が多い、其の事は理解しているようで、アンケート⑤の回答で7割の学生は就職する医療機関でDPC算定の行われている割合が高いと認識しているようである。

その結果、最後の質問にも真剣に考えて回答した者が多くいた。

5. まとめ—考察

以上、医療事務の授業でのDPC、また、関連してコーディングの授業が不可欠になってくる現在の現場事情とその授業への取り入れ方が問題であるということがわかったと思うが、まず、診療報酬請求事務の基本が出来ないと、そこから包括点数には進めない。仮に包括からはいると、出来高払いの複雑な点数表計算に戸惑うこと必須と思われる。そして、コーディングであるが、コーディングが正しくしっかり出来ないと包括算定が出来ない。そう考えると本格的DPC算定が診療報酬請求事務やコーディングの後回しになるのはやむをえない、のであろうか。だが、現場の実務を言えば後回しにもしてられない。具体的に可能かどうかは別として、医学知識や医療用語を軸としながら、診療報酬請求事務とコーディングを平行して学びつつ、演習しつつ、授業を進めて行きたいものである。

理想を言わせてもらえば、1日かけた医療事務の授業として、1限目はある疾病の患者がある医療機関に来院した、その患者の病名、そしてどういう病気か、また、医療機関はどの規模の医療機関か、そこでの接遇はどうあるべきか。科目「病院組織・医療法規・患者接遇」2限目は、その病気にはどういう治療がされるか、どういう薬が処方されるか。科目「医学知識・薬学知識」3限目は、診療内容を会計する。そこで点数計算の演習。科目「診療報酬請求事務」あるいは医事コンを使って「医事コンピューター」4限目は、この請求で病院の経営はどうなっていくか、病院経営の問題点。科目「病院管理・病院経営」と、このような流れで授業を進めていけば、一つ一つの授業がいかに繋がって医療機関のスタッフとして、ライン部門のメンバーとチームを組んで医療機関の、もっと大きく言ってしまうと日本の医療を支えていけるか、学生も実感でき、やる気が出る筈である。

実際に行うには問題点も多く、なかなか実現には難しいが、私はこの方向性で授業を行うことをひとつの理想の形としている。

参考文献

『入門診療報酬の請求.』2010-11 医学通信社

『DPC 請求 NAVI』 医学通信社

『医事業務』2011 11/15日号「DPC データから直接分析をする」 産労総合研究所

「第46回医療秘書技能検定試験 1級 医療事務」 医療秘書教育全国協議会

「第42回医療秘書技能検定試験 準1級 医療事務」 医療秘書教育全国協議会

「第44回医療秘書技能検定試験 準1級 医療事務」 医療秘書教育全国協議会

「第45回医療秘書技能検定試験 準1級 医療事務」 医療秘書教育全国協議会

「第45回医療秘書技能検定試験 2級 医療事務」 医療秘書教育全国協議会